



contents

2021
No.
121

- 企画展** 開館 30 周年記念企画展
芭蕉翁絵詞伝と義仲寺
P1～P3
- 学芸員のノートから** 古代寺院の屋根を飾った瓦
～大津市域出土の鴟尾と鬼瓦～
P4～P5
- 収蔵品紹介** 御家流手鑑のうち千字文（本館蔵）
P6



大津市歴史博物館

令和 3 年 1 月 15 日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

<http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/>

大津市歴史博物館
開館 30 周年記念企画展

**芭蕉翁絵詞伝
と
義仲寺**

令和 3 年 2 月 27 日(土)
～ 4 月 11 日(日)

かつて門外不出であった
義仲寺の寺宝
「芭蕉翁絵詞伝」
初の全巻公開 !!



芭蕉翁絵詞伝 浮御堂へ月見の舟遊び（部分）義仲寺蔵 鎖明て月さし入よ浮御堂（芭蕉句）



芭蕉翁絵詞伝〔義仲寺に葬られた松尾芭蕉。翁塚（芭蕉墓碑）が立てられる〕義仲寺蔵

さながら松尾芭蕉の生涯を辿るドキュメンタリー映画

「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」

松尾芭蕉(1644-94)が詠んだ辞世の句が物語のように、彼はさらなる俳諧の高みを求めて、創作活動の多くの日々を、旅に過ごしました。

その生涯を、入念な考証による伝記にあらわし、さらに芭蕉が訪れた全国の著名な歌枕や、名句が詠まれた現地を、朝廷の御用絵師、狩野正榮かのうしょうえい至信に依頼して詳細な名所風景画として挿絵を添えて完成させたのが、全3巻、約40mにおよぶ一大絵巻『芭蕉翁絵詞伝』です。

これほどの大作を制作するためには、周到な準備と資金計画が必要です。それを、並外れた情熱と意志で貫徹したのが僧侶にして俳人、そして芭蕉研究者であった蝶夢ちょうむ(1732-96)でした。

彼は芭蕉の百回忌が12年後に迫った天明元年(1781)頃、記念事業としてこの絵詞伝の制作を思い立ったことが、友人の俳人への書簡から判明しています。

それを達成するために、芭蕉に関する著作を出版し、俳諧活動で地方を回りながら募金活動を行うなど、制作資金を確保しています。一方で、芭蕉の故郷伊賀上野を調査し、苦勞して前半生の伝記を形にすると、その上に、すでに上梓されている芭蕉の俳文や紀行文、および略伝を再編集して、芭蕉の俳諧人生を絵巻に仕立てています。

したがって、教科書などで覚えのある有名な紀行文の一文がよく登場し、その場面は、実はこんな風景だったのか、という気分を味わえる絵巻となっています。

芭蕉の辿った旅を追体験

例えば、大津市内の挿絵を例にとると、芭蕉が滞在した国分山の幻住庵げんじゅうあん(元禄3年〔1690〕4月6日から4月23日まで滞在)を描いた場面などは、幻住庵の描写以上に、湖岸から瀬田川にかけての景観を実に丁寧に描いています。

この場面は、上空から眺める俯瞰構図によって、膳所の城下町の木戸をぬけて瀬田唐橋までの東海道を描いているのですが、S字に曲がる当時の道筋がかなりリアルであり、また見事な松並木は、ここが近江八景あわづのせいらんの粟津晴嵐であることを気づかせます。さらに、松並木の中間に築かれた一里塚の存在もしっかり描かれているばかりか、当時、原野であった粟津が原には、木曾義仲の側近でここで最期を遂げた今井兼平の塚が見えています。現在の兼平塚

は、工場や住宅に囲まれて気がつきにくいのですが、当時は、さぞかし目立つランドマークだったのでしょう。

それだけでなく、東海道から分岐して石山寺に向かうほたるだに螢谷の参道が、現代とはまるで違って、細い崖道だったのはちょっと驚きです。この道を高齢の巡礼者などが往来するのは少々危険なので、石山寺へ詣でる人々の多くは、大津や松本村石場などの船入りから、石山寺の仁王門脇の船着きを船で目指したのです。

このように本作は、当時の巡礼や旅路の景観が手に取るようにわかる旅の絵本ならぬ、旅の絵巻なのです。

充実ぶりをみせる蝶夢の取材力!!

ちょうど、絵詞伝が完成した寛政4年(1792)の頃は、全国でも旅行ブームに沸いており、旅行情報誌も、元禄3年以降から様々なものが出版されていました。旅がしやすくなったこともあり、諸国を往来する俳人(蝶夢自身もそうですが)も多くあらわれました。芭蕉の命日に時雨会を開催する義仲寺は、そのような俳人たちが集う寺でした。さぞかし、芭蕉翁百回忌以降の時雨会に参列した俳人たちは、絵詞伝のお披露目に際して、芭蕉の足跡における現地や景観の情報の豊富さに眼をとめて、追慕の念を、改めて深くしたのではないのでしょうか。

とりわけ、18世紀当時でも、東北地方の名所に関する版本類の絵画情報は、松島を除くと上方には流布していませんでしたが、絵詞伝には、壺の碑いしづみ(多賀城碑)や象瀉きさかたなどの場面が描かれ、しかも、わりあい实景に近い描写なのです。それもそのはず、仙台の画人、大原官次という人物に、出張写生を依頼して、象瀉などの東北の写生図を入手しているのです。

いずれにせよ、絵詞伝の挿絵は、大画面かつ丁寧に、贅沢に顔料や金泥を使用した描写なので、まるで現代の4Kや8Kモニターで芭蕉の生涯を特集した歴史番組を見るが如し、ではなかったのでしょうか。さながら、国宝「一遍聖絵」の松尾芭蕉版と言ってもよいでしょう。

蝶夢の、おそろべき、もうひとつの情熱

絵詞伝の仕事は、本邦初の松尾芭蕉伝の上梓というだけでなく、それを絵巻としてプロデュースして、さらに資金調達までやってのけるという蝶夢の情熱の賜物なのですが、蝶夢のおそろべき仕事は、なんと絵詞伝だけではありません。同時期に、10年以上の歳月をかけ、彼は地道に俳諧人脈をたどり、芭蕉門人の遺族や子孫を訪ね歩



芭蕉翁絵詞伝〔国分山の幻住庵（画面中央）と膳所城から瀬田唐橋及び石山寺〕 義仲寺蔵

先頼む椎の木もあり夏木立（芭蕉句 画面右端）

き、門人たちの俳諧書跡の寄付を要請して、「芭蕉門古人しんせき真蹟」という蕉門俳人書跡アルバム（折本帖）を集成したのです。

本帖には、現状で79点が貼付けられており、その殆どには寄付者名を記した蝶夢の付箋が貼ってあります。それだけでも、ただものではない蝶夢の律儀さが窺えるのですが、うち7点は寄贈年月日（安永9年〔1780〕から天明5年〔1785〕まで）までもが記されているので驚きです。

さらに、蝶夢の跋文（あとがき）を読むと、こうあります。

芭蕉没して九十年、蕉門故人の筆跡を見ることは既に稀となったので、後人のためにと考えて、芭蕉の故郷伊賀の国の藤堂家関係をはじめとして、墓所のある近江の国、更に伊勢・尾張・武蔵の諸国にまで蕉門故人の子孫や弟子を訪ねて、真蹟類の寄付を請い集めて一書に編成し、義仲寺の什物として後人の披見・追慕に資するもの。

とあり、その計り知れない情熱には、企画展担当者としても、ただただ首を垂れるばかりです。

恐らく、蝶夢の来訪をうけた門人の遺族や子孫は、最初は多分、訝しんだのですが、

ただならぬ彼の情熱に根負けして、伝来の家宝を蝶夢に提供したのだと思われます。

歴史博物館では、開館30年を記念して、このおそるべき仕事たちを、初めて一気に公開いたします。

ぜひこの機会に、蝶夢の情熱に打たれてください。

（学芸員 横谷賢一郎）



芭蕉門古人真蹟のうち河合智月・乙州親子の俳画・短冊 義仲寺蔵

右) あぢさいはまたはなしやもの四十から ち月

左) 嗽の軒端ににつと梅花 乙州

古代寺院の屋根を飾った瓦 ～大津市域出土の鴟尾と鬼瓦～

常設展示の鴟尾はレプリカ？本物？

大津市に残る数多くの文化財の中で、重要文化財（美術工芸品）は306件（令和2年11月1日現在）。そのうちの1件が、山ノ神遺跡（大津市一里山三丁目）出土の4基の大型鴟尾で、本館で保管されています。このうちの1基は常設展示室2階の古代コーナーに展示中で、いつでもご覧いただけるのですが、来館者の方からよく尋ねられるのが「これは、レプリカ？」というご質問。素朴な見た目がそう思わせるのでしょうか。これ、レプリカではなく本物です。



常設展示中の山ノ神遺跡出土の鴟尾（重要文化財）

鴟尾は、古代の寺院や宮殿で、瓦屋根の両端に取り付けられた巨大な飾りです。時代が進むと、鯨にかわります。また、同じように棟端を飾る瓦に鬼瓦があります。奈良の唐招提寺のように、創建当初の鴟尾が保存されている例もありますが、大半は発掘調査で一部が破片として出土するのみで、全体のうちのわずかな部分しか確認することができません。

山ノ神遺跡は寺院跡ではなく、7世紀後半のごく短期間に須恵器や鴟尾を作った窯跡です。そのうち4号窯は4基の鴟尾を焼成している途中で崩落し、内部の鴟尾は生焼けの状態で未完成のままに崩れてしまいました。当時の人々は掘り出すことをあきらめたのでしょう。鴟尾ごと放置された窯が残り、発掘調査では4基の鴟尾のほぼ全体の破片が見つかりました。4基はおおよそ同じ作りに同じ大きさで、高さ約140cm、基底部分前後の長さ約100cmという全体像が復元でき、その制作工程までわかったとても貴重な例です。展示品のように、出土し

た破片をつなぎ合わせて全体の形を復元する際は、通常、足りない部分を石膏などで補いますが、これはほぼ全てが実物です（ただし、鴟尾の下のはしご状の台座部分は、炭化して出土した木材をもとに再現したものです）。

では、大津市域の出土例で、山ノ神遺跡以外の鴟尾にはどのようなものがあるのでしょうか。最近、大津市域の鴟尾と鬼瓦の出土例を改めて調査する機会があったので、ここでも少し紹介したいと思います。

大津市域出土の鴟尾

鴟尾は、日本列島での古代寺院のはじまりである飛鳥寺から使われており、滋賀県では22遺跡で確認されています。白鳳期の寺院跡や生産遺跡からの出土が中心です。大津市域では、南滋賀町廃寺、榎木原遺跡、穴太廃寺、真野廃寺、山ノ神遺跡で出土しています。

南滋賀町廃寺は、近江大津宮の中枢部が見つかった錦織遺跡から北へ500m程のところにあり、川原寺式の伽藍配置をもつ大規模な古代寺院跡です。隣接する榎木原遺跡は、南滋賀町廃寺の瓦を作った瓦窯と工房跡の遺跡です。

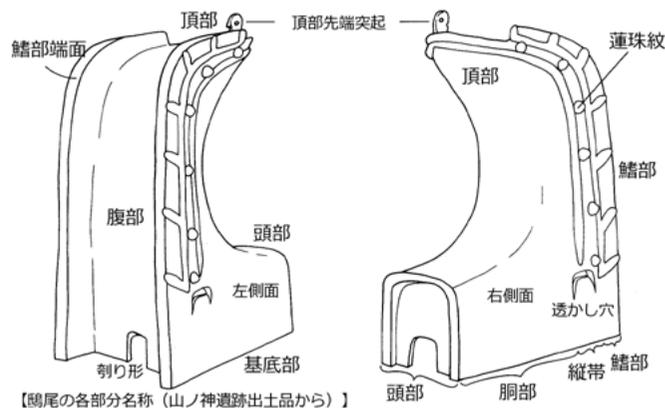
ちなみに、「廃寺」は現存しない寺院跡のことですが、当時の名前が今には伝わらない寺院の場合、「現在の地名＋廃寺」という遺跡名でよく呼ばれています。一方、滋賀里の山中にある古代寺院跡は、平安時代後期の『扶桑略記』に記されている天智天皇勅願の崇福寺跡と考えられ、元の名前がわかるために、その名が遺跡名になっています。

南滋賀町廃寺では、2種類の鴟尾が確認されています。一つは表面の装飾がない無文の鴟尾で、もう一つは暗灰色で硬く焼きしめられ、縦帯や段型の装飾がつくものです。



伝南滋賀町廃寺出土の鴟尾
(高浜市やきもの里かわら美術館蔵)

写真のように頂部先端の破片が確認でき、正面で交差する帯が貼り付けられ、^{ひれ}鰭部から胴部にかけては段を削り出して表現していることがわかります。このような段型の表現は鰭尾の装飾でよくみられます。なお、榎木原遺跡では無文の鰭尾しか出土しておらず、この鰭尾は別の^{たいぼうじ}場所で作られたようです。高島市新旭町の大宝寺跡出土の鰭尾とよく似た作りで、同じ工人集団が作った可能性が以前から指摘されています。また、山ノ神遺跡の鰭尾は、ひも状の粘土を鰭部に貼り付けていますが、この段型の表現が簡略化されたものではないかと思われます。



【鰭尾の各部分名称 (山ノ神遺跡出土品から)】

穴太廃寺(穴太遺跡)では、大津市域で最も古い瓦が見つかっており、7世紀前半には創建され、近江大津宮の時期に前後して2度の建て替えがあったと考えられています。鰭尾は、複数種類の破片が出土しています。一つは、南滋賀町廃寺の鰭尾と同様に鰭部から胴部全体にかけて段型がつくもので、胴部や鰭部などの破片から、高さ約127cm、基底部前後の長さ約76cmになると推定復元されています(これは見つかった破片を元に、足りない部分を補いつつ全形が復元されたものです)。また同様のつくりで、ひと回り小さいとみられる鰭尾の破片(写真右)も見つかっています。



左：復元された鰭尾
右：鰭部の破片
穴太廃寺出土の鰭尾
(滋賀県教育委員会蔵)

さらに、穴太廃寺では、鰭尾の頂部付近の片側と考えられる大型の破片が見つかっています。表面を細かい白土で仕上げられており、段や文様などは見られません。

真野廃寺は、近年の調査で方形の基壇状遺構と礎石、瓦窯などが確認されている古代寺院跡です。鰭尾は、頭部の右側面角にあたる破片1点のみが出土しました。全体の形は不明ですが、頭部の幅が30cm以上と推定できます。



真野廃寺出土の鰭尾
(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

山ノ神遺跡の鰭尾は窯跡で発見されているため、どの寺院に運ばれる予定だったのかはわかりません。しかし、このような同時期の寺院跡出土の鰭尾からすると、ずいぶん装飾が簡素であることが気になります。

大津市域出土の鬼瓦

白鳳期～平安時代の鬼瓦は、大津市域では崇福寺跡、南滋賀町廃寺、榎木原遺跡、瀬田廃寺、南郷田中瓦窯跡、近江国庁跡、惣山遺跡、堂ノ上遺跡などから出土しています。「鬼瓦」としては、当初は^{れんげ}蓮華文や^{ひうん}飛雲文をあしらった瓦で、図柄に「鬼」の要素はありません。飛雲文瓦は、大津市では、南滋賀町廃寺の系列のもの、近江国府関連の系列のものがあります。そして、奈良～平安時代には、下の写真の崇福寺跡出土の鬼瓦のように鬼面文が登場します。



左：南滋賀町廃寺出土の飛雲文瓦
右：崇福寺跡出土の鬼面文瓦
(ともに近江神宮蔵、大津市歴史博物館寄託品)

鬼瓦については現在整理中ですが、当館保管の資料とともに、これらの大津市域出土の鰭尾と鬼瓦を、いずれミニ企画展でも詳しく紹介したいと考えています。

(学芸員 福庭万里子)

收藏品紹介

御家流手鑑のうち千字文 (本館蔵)

くねくねとした字で書かれている古文書を見てどのようなと思われますか。「自由にくずしているのでは?」と思われるかもしれませんが、江戸時代の古文書は「御家流」と言われる書風を基本として書かれています。

御家流とは、尊円法親王(1298-1356)が創始した書の流派で、もともとは青蓮院流や尊円流と呼ばれていましたが、江戸時代に一般の人々に御家流と呼ばれるようになりました。後に能書家の松花堂昭乗(1582-1639)が幕府の右筆(書記)に書法を教えたことにより、公用書に採用され、全国に広まっていきました。そして寺子屋では習字の手本として、この書風が使用されていきました。

本館にはこうした御家流の名前を冠した手鑑(鑑賞用作品集)15点(下記一覧)が収蔵されています。個人の方が所蔵していたものを、本館に寄贈いただいた資料です。

表題に御家流と冠した「千字文」(No8・9)「風月往来」(No13)などは江戸時代には手習いに使われていました。また、「尊純」(1591-1653)・「尊朝」(1552-1597)や「平野仲安」(慶長5年[1600]頃没)などの名前が見受けられるのは、江戸時代前期の御家流の書家です。分類として漢字や仮名、往来物などの手習いものと、御家流に属した人々の名前を冠したものにカテゴリができます。一部、書状も含まれますが、全体として御家流に関し、手習い用の資料と思われます。

今回はこの中から、さらに「千字文」についてくわしく紹介しましょう。梁の武帝の命により周興嗣(470-521)が王羲之(303-361)の書体から一字も重複せずに千字を選んで書いたものです。後に江戸時代には、千字文は手習い本として漢字を覚えるための入門書として寺子屋

などで活用されていきます。

さらに、千字文は単なる手習い本として江戸時代に広まっただけでなく、中国や日本では多くの書家に書かれてきたという特徴があります。また書家も王羲之の字を臨書(字を真似する)するのではなく、彼ら独自の書風を用いて千字文を書き残しています。中国では、隋から明時代にかけての書家の作品が有名であり、日本でも、江戸時代や明治時代の書家によって書かれてきましたが、滋賀県に縁のある書家では日下部鳴鶴(1838-1922)も千字文を書き残しています。

下の画像は今回紹介した千字文の冒頭部分です。装丁は折本状で、奥書は記載されていませんが、紙質や筆致から江戸時代後期ではないかと思われます。次に行数や字数をみると、1行に6字、書体は行書体(漢字をくずした字体)が主で、草書体(さらにくずした字体)が少し入り混じって書かれています。墨の濃淡は、かすれてきたぐらいで墨がつけられており、極端なかすれは見受けられません。通常、書道の行書・草書の作品は、字の大きさに大小があり、また隣と並ばないようにして書くのが一般的ですが、本資料では異なっています。

江戸時代、文書は全国各地で書かれ、その量は増大していきました。増大した要因については複数ありますが、御家流の書風が公用書に採用され、寺子屋でこの書風が手本として使用されたことも要因の一つと思われます。

本資料も手鑑あるいは手習い用として収集・保存されて、現在まで大切に保管されてきたのでしょう。

(新木慧一)

No	資料名
1	尊円法親王法帖
2	御家流巻物
3	御家流巻物
4	尊円法親王墨添
5	尊純法親王詩歌集
6	尊朝法親王御書
7	古今集真名序
8	御家流千字文
9	御家流千字文
10	尊證法親王御筆
11	平野仲安消息
12	御家流国つくし巻物
13	御家流風月往来
14	八幡松花堂古来法帖
15	御家流百人一首



(千字文冒頭部分)